震災から学んだこと

宮城県気仙沼向洋高等学校
三年　小野寺　朱音

五年前の東日本大震災、私が住んでいる気仙沼市は大きな被害を受けました。当時、中学一年生だった私は翌日に控える卒業式の準備をしていました。友達と階段を上り終えたとたん、今まで体験したこともない大きな揺れを感じ、揺れの中ふらつきながらも校庭に走りました。校庭に生徒たちが集まり、親の迎えを待ちながら、これからどうなるのかと不安と恐怖で泣いている人もいました。数分して、津波警報が鳴りました。その警報は時間がたつごとに三メートル、五メートル、八メートルと数値が上がっていき、私はこの上ない恐怖を感じました。ようやく父が迎えに来たので車に乗り、自分の地区の高台へ避難しようと車を発進させたその時、父が、

「津波だ！」

と前方を指さしながら叫びました。私も慌てて前を見ましたが、そこには黒い大きな壁のような塊が目の前に迫っていました。私は唖然としてしまいましたが、父は急いで車を中学校の校庭まで移動させ、まだ校庭に残っている先生方や生徒たちに呼びかけ、みんなで中学校脇の高台へと上がりました。高台に上がり安心したのもつかの間、私たちが避難した高台は完全に離れ小島となってしまい、気仙沼の港のある方向を見ると真っ赤に空が染まっており、そこにいる人々は自然の驚異に何をすることもできませんでした。しかし、その時の私は、さっきまであった恐怖や不安は完全に消え、目の前の現状を受け入れられず、これは夢なのかと思うことしかできませんでした。

その夜は中学校の体育館で過ごし、夜が明け、波が引いてから親戚の家に移動しました。私の家は天井まで波が入り全壊となってしまったため、その日から親戚の家で四ヶ月間過ごすことになりました。移動の途中も道路に広がる瓦礫の山、土台しかない家々、首輪をつけた泥だらけのペットなど他にも無残な光景が広がっていました。親戚の家に避難しても、水道、電気は途絶えてしまっているので何とか力を合わせて生活していましたが、慣れない環境の中の避難生活は私にとってストレスが大きく意味もなく泣いてしまう時もありました。震災から三ヶ月たち、家の修理が始まり一ヶ月たつころには住める状態になったので、自分の家に帰ることができました。

そこから日々少しずつではありますが、復興に向けてたくさんの支援を受けながら私は今、普通の生活を送ることができています。しかし、津波で失われてしまい取り戻せなくなったものはたくさんあります。失われた人命、津波によって家が流され住民同士のコミュニケーションがとれなくなってしまった地域、原発事故の影響により風評被害を未だに受けている地域や産物、被害を受けた人達の心の傷。東北が完全に復興するには、あと何年の月日がかかるのでしょうか。復興は確実に進んでいます。しかし、このような現状があることを知ってもらいたいです。

私自身、震災を通して多くのことを学びました。その中で一番印象に残っているのはやはり、人と人の絆です。ボランティア活動でわざわざ遠方から来てくださった人たち、仕事だとはいえ、一生懸命一人ひとりのことを考えて作業してくださった自衛隊の方々、海外からの支援。自然によって壊されたものを人の手で直していく。その修復力は、人の優しさ、思いやりの心があったからこそ、強く大きな力となったのだと思います。

私が受けさせていただいた支援の一つ、「東日本夢の架け橋プロジェクト」を行っているＮＰＯ法人の一つの団体には感謝してもしきれない思いがあります。その「東日本夢の架け橋プロジェクト」とはニューヨークに滞在されている日本人の方々が行っているもので、被害を受けた水産高校の生徒をニューヨークに招待し、様々な研修をすることでマイナスだった震災の経験をプラスに変え、将来に生かすことを目的にしている活動です。私はこのお話をいただき、これは滅多に体験できないチャンスだと思い、行かせてもらうこととなりました。研修内容は、英語の講習や英語でのスピーチ発表や観光などでした。

その中でも一番心に残っているのはお会いした人たちの人生の体験談を聞かせていただいたことです。人それぞれの人生観、体験してきたことは違います。しかし、成功している方々はみんな努力を惜しまず、自分の夢に向かって頑張っているのだと思いました。私は将来、看護師になりたいという夢を持っています。私が今回行かせていただいたニューヨーク研修は、この夢をさらに後押ししてくれました。お会いした方々は本当に心優しい人ばかりで、私たちを手厚くもてなしてくれました。私もあの方たちのように自分の夢を努力で手に入れ、そして世界中の恵まれない子供たちに人生を変えるきっかけとなる体験をさせてあげたいと思っています。

東日本大震災は、私にとって大きな傷でもありましたが人の優しさ、絆のおかげでニューヨーク研修という人生で一番の勉強になった体験をすることができました。私は、震災そのものはマイナスでしたが、その後の人と人のつながりのおかげでプラスの経験もできたと思います。看護師という夢の実現や、お世話になった人たちに恩を返すためにも、今、自分は努力を惜しまず勉強に励んでいきたいです。そしていつか、自分がしてもらったことを他の人たちにしてあげたいです。

あれから五年たって

宮城県多賀城高等学校　一年　阿部　倫也

震災から五年たって、震災が起こった日に撮っておいた家の写真を見返しました。震災のことを忘れないために撮ったのに、あの日から写真をまったく見ていませんでした。写真を見ていくとその時の様子がだんだんと鮮明になって頭の中に浮かんできました。私の家は幸い津波の影響を受けていませんが、あの大きな地震の被害で棚が倒れて落ちたり、壁にヒビが入ったりして、家の中はとても住める状況ではありませんでした。私は、そのとき小学校にいました。突然来た大きな揺れで立っていることができず、急いで机の下に隠れて身を守っていました。その後の校内放送で校庭に避難した時に雪が降ってきました。とても寒い中、待機をするのはとても大変でした。家に帰ってからラジオを聞いて、この地震がとてつもない被害をもたらしていることを知りました。当時の私は小学校五年生で、とても怖かったことを覚えています。

私は、近所にある祖父の家にしばらくの間住まわせてもらうことになりました。電気やガス、水道といったライフラインが完全に止まった中、私はただ寒さに耐えるしかありませんでした。そんなどうしようもなかった時に、助けてくれたのは、地域の人々でした。お菓子などを持ってきてくれました。その時はとても助かりました。また、他の人が困っている時は、物を貸しました。地域の人々の助け合い、支え合いがいかに大切なことか改めて実感しました。

あれから五年たって私は、防災に関する授業で東北大学の人から地震や防災や減災のあり方、復興についてなどを勉強しました。私は防災や復興についてはいくらか知っていましたが、減災についてはまったく知りませんでした。

私は、震災を経験して、人と人との「絆」の大切さを知ることができました。また、同じことがこれから起こっても前と同じようなことにならないためにも、私たちが身近にできる対策はないか、いろいろと調べようと思いました。

今までの生活とこれから

宮城県気仙沼向洋高等学校　三年　小原　祐仁

平成二十三年三月十一日、その日、先輩達の卒業式の準備を行っていた私の生活が大きく変わりました。その地震は、後に東日本大震災と呼ばれるほど大きな地震でした。初めは大きな地響きが鳴り、段々と揺れが激しくなって学校の壁に亀裂が入りました。揺れが少し収まり校庭へと非難しました。その後、避難所だった中学校に続々と地域の人達が避難して来た体育館の片付けをしました。その日は電気がつかずろうそくを灯し、地震が続く不安の中夜を過ごしました。時間が経つにつれ地震による影響が段々と分かってきました。地震により津波が起きたこと、その津波によって地域が壊滅的な被害を受けたことなどたくさんの情報が流れていました。その後、四ヶ月にも及ぶ体育館での生活を送りました。避難所では地域の人達との共同生活で、不安やストレスなどたくさんの障害のある中での生活でした。そんな中、私は多くの応援や支援をしていただき、人の温かみを感じることができました。わざわざ遠くから来て暖かい声をかけてくださって、「逆に私たちが元気をもらった。」と言って帰っていく姿にも感動しました。

震災後、しばらくして中学校生活が始まりました。学校では、教科書や制服が流されてしまったり、給食が振りかけのみだったり、体育館が使えず小学校の体育館を借りたりして、大変な環境の中での生活でした。しかし、中学校生活ではたくさんの支援をいただき、無事に中学校も卒業して、高校に入学することができました。高校生活は震災の影響で仮設校舎での生活となりました。高校では元々興味があった工業のことを学びました。高校に入学してからも多くの方々から支援をしていただき、勉学に励むことが出来ました。震災から約五年がたちましたが、これまで本当にたくさんの支援をいただいてきました。

まだまだ震災の傷跡が残り、復興半ばの気仙沼ですが、これからは助けていただいた私たちが恩返ししていかなければいけません。そこで私たちは自分の夢をかなえることで地元や日本そして世界にも恩返ししていきたいと考えています。東日本大震災を悲しい過去としてだけではなく、私たちがたくさんの人達とのふれあいを通して成長できたきっかけの日として、これからも語り受け継いでいきたいと考えています。

次の世代へ

宮城県気仙沼高等学校　三年　三浦　果歩

思い出すのもつらい、あの東日本大震災から五年目を迎えようとしています。気仙沼の街は、かさ上げ工事や、災害公営住宅の建設などが進み、一歩ずつ復興に近づいてきていると思います。復興のスピードは遅いかもしれませんが、今も被災地気仙沼の復興のために頑張っている人が大勢いること、ここまで復活して来られたのは、自衛隊の支援やボランティアの方々など、多くの皆さんの手助けがあったからだということを、私たちは決して忘れてはいけないと思います。

私は高校で所属していた部活動の大会や練習試合の遠征で、気仙沼を離れる機会が多くありました。その際、「気仙沼」というロゴの入ったウエアを着ていると、知らない人に

「大丈夫だった」「頑張って」

と声をかけてもらうことがあり、その度に、自分はたくさんの人に支えられて生きているのだと再確認することができました。

震災の時にはまだ中学一年生だった私は、大人に支えてもらって生きていました。しかし、今では高校三年生になりました。これからは私たちの世代が頑張っていく番です。気仙沼に残る人、離れる人、それぞれ道は分かれても、これまで支援してくださった方々への感謝の気持ちは、みんなで共有し持ち続けていくべきです。

また、私たちは、震災を経験した者として、震災の記憶を風化させないよう、次の世代へ語り継いでいく使命があると思います。伝えていくことで、いつかまた同じような規模の地震や津波があった時に、今回のような甚大な被害、何よりも大切な人命が失われないよう、被害を最小限にとどめることが、私たちの世代の役割だと思います。

私も来年から故郷気仙沼を離れますが、またいつか、気仙沼に帰ってくる時には、しっかり勉強して世に中のために役に立てるような立派な大人になって帰って来られるように頑張ります。

変わったこと

宮城県多賀城高等学校　一年　山中　耀璃

東日本大震災から五年目を迎え、国や自治体などが新たな問題に直面している中、いろいろな人の政府の動きなどに関する抗議活動を見ていると、どのような思いで言っているのだろうと、考えることがあります。このことから自分は社会について深く知ろうと積極的になっていることがわかりました。

震災前は表面だけを知っただけで全てを知ったように思っていましたが、今では相手の言いたいことを自分の言い方に直してから、その意見や言葉の裏に隠されたものを知ろうと積極的に考え、動くようになりました。

また、「必要最低限」なものとそうでないものを見極める力がこの数年で上がりました。これまでは「二度と手に入れられないもの」や「誰々からもらったもの」など、今思えば必要なかったものばかりをかばんに入れていました。しかし今は「こういうことがあった時にあるといいもの」に絞り、「いくつもの使い方ができるもの」や「起こる可能性が高い出来事が起きた時に必要なもの」というように本当に必要なものは何かを数年前と比べ正しく考えられるようになりました。ただ今でも必要ないだろうというものを選んでしまうこともあります。しかし、これらの経験を積んでいって「必要最低限」を極めていきたいです。

私の住んでいる町は、東日本大震災で大きな被害を受けることはありませんでした。そのせいだからか、私の周りで亡くなった方はいませんでした。テレビで「親が亡くなった。」や「友人が亡くなった。」と言う人がいろいろな活動をしているのを報道していますが、私は「そのようなことがなかっただけ幸せだよ。」という祖母の言葉は、震災で身内の人が亡くなった人たちの立場から思えばあたり前でも、私のような人からすれば、どういったように感じるだろうとその取材の様子を見ているとふと考えます。私は、そうだなと思いながらも同じ被災者として、その人たちや何かのためにあの時動いていればよかったのではないかなどと、後悔をしている自分もいます。

震災前と比べ、いろいろと成長しましたが、まだ変わっていないところもあるので、そこのところも少しずつだとしても成長させていきたいです。